

部屋に入ったときに、ああ、とうとう来たか、と思つた。見る前から、なんとなく心配でわかる、と言つていた友人の言葉が思い出される。

大学生一人暮らしのワンルームは、ベッドと小さなちやぶ台を置いただけでいっぱいになる。当然、そこまで隠れるところがあるはずもない。見回すと、彼女はすぐに見つかった。

赤い振り袖を着て黒いおかつぱの、小さな少女がベッドの隅に立っている。服装もさることながら、ペットボトルサイズの全長が、彼女が明らかに普通の存在出ないことを伝えていた。

彼女は僕と目が合うと微笑んで口を開いた。

「はじめまして、お邪魔しております」

しゃべるタイプかあ、と僕は思わずため息をついた。

サンショウウオ

親知らずさん

「へえ、来たんだ、《親知らずさん》。どんなだった？」

「日本人形みたいな見た目してる」

「定番だな」

「俺もそうだったわ」

大学の食堂のうどんはまあまあ美味しい。いつもの様に麵をすすりながら親知らずさんの話をする、級友である秋葉と石田は笑った。

「あれってさ、一説によると、前世の恋人の姿らしい」

「ガセっぽいな、それ」

「秋葉と石田はいつぐらいい来たんだっけ？」

うどんを食べる手を止めて聞くと、二人は少し思ひ出すような仕草をした。

「大学一年の、夏かな。石田は割とこの間だったっけ？」

「もう結構前だよ、去年の秋だった」

「そうだよな。皆大体大学一年か二年で来るから、僕はもう来ないってことでいいのかと思つてたよ」

家にいる彼女の姿を思い出し、ため息をつく、石田がうなずいた。

「確かに大学三年で来る人はあまり聞かないな……。レアタイプじゃん」

「あんまり嬉しくない」

「俺の父親は、来なかったって。色々《祓い》も、予約してたみたいだけど」

「《祓い》かあ……」

石田の言葉を反芻しながら、最後の一口になった麵をすすった。

「上橋は《祓い》すんの？たまに祓わずにそのままにする人いるらしいけど」

「祓わなくてもいいかなと、来る前は思ってたんだけどなあ。しゃべるんだよ、うちの」

「じゃあ、だめだ」

秋葉が肩をすくめた。しゃべる《親知らずさん》は祓った方がいいというのが、常識である。

「親戚の知り合いの話んだけどさ」

「遠いなー」

石田の前置きに、秋葉が茶々を入れる。それに笑いながら、秋葉が続けた。

「遠い人ね、その人がしゃべるタイプの《親知らずさん》だったんだけどさ、そんなにたいしたことというわけでもないし、《祓い》の保険適用手続きも面倒だったからほっといたんだって」

「保険適用めんどくさいからなー、自費だとめっちゃくちや高いし」

「そうそう。でもね、やっぱり一年くらいしたら、ちよ

つと精神の方がおかしくなっちゃったみたいでさ、結局
祓ってた」

うどんの汁を飲み干した僕は、その話にため息をつく。
「やっぱり祓わないとダメか」

「その方がいいとは思うよ。しゃべらなければ置物みた
いなもんだし、害はないけど、こればかりは運だから
ね」

石田のアドバイスにうなずくと、僕はスマートフォン
を起動させてメモアプリに『『祓い』 予約』と書き込ん
だ。

「おかえりなさいませ」

家に帰ると、朝と同じ所に『親知らずさん』は立って
いた。彼女は動かないタイプらしく、姿勢も全く変わっ
ていない。一人暮らし三年目の身には、「おかえり」の挨拶
が結構嬉しくて、思わず顔がほころんだ。

「ただいま」

こうやって返しちゃうのは駄目なんだろうなあと、石
田の話の思い出しながらついつい返してしまう。そうす
ると『親知らずさん』も微笑んでくれた。

「ここは陽の向きがよろしくて、気持ちようございます
ね。午前中はずっとひなたぼっこしております」
「それはよかったですよ」

『『親知らずさん』』は一説によると、前世の恋人の姿ら
しい。その言葉を信じるなら、彼女は僕の根源的な理想
のタイプなんだろうか。そう思うと、ゆったりした穏や
かな様子も悪くないなあと思った。ペットボトルサイズの
子に何か思うわけではないが。

僕は荷物を置くと、ティファールに水を注いで、スイ

ッチを入れた。

「『親知らずさん』はそこから動けないの？」

「自分では動けません、上橋様が動いて欲しいと思っ
てくださるなら、動けます」

「じゃあ、こっちおいでよ」

お客様用のカップを二セットと、自分のマグカップに
お湯を注ぐと、ふんわりとハーブの匂いが香った。

「これ、僕の好きなハーブなんだ」

「光栄です、ありがとうございます」

彼女は嬉しそうに、小さな足でこちらへ走って来ると、
上品にちやぶ台についた。彼女の前にカップをそっと置
く。少し大きすぎるかと思っただが、彼女は小さな手で器
用にカップを持って、口を付けた。

「美味しゅうございますねえ、ありがとうございます」

「それはよかったです」

僕は自分の分をすすり、『親知らずさん』に微笑みかけ
ると、スマートフォンで『お祓い 予約 早い』と検索
した。